

## 平成25年度 自然史博物館活動の評価結果

平成26年7月29日  
群馬県立自然史博物館

### 1 はじめに

本評価は、平成23年度に策定した「活動目標の評価指標表（評価指標）」を用いた内部評価であり、昨年6月26日に公表した平成24年度の博物館活動の評価に続いて3回目となるものである。昨年度同様、本評価結果を今後の博物館活動の改善と充実につなげていきたい。

### 2 評価方法等について

#### (1) 評価指標

今回の評価に当たっては、昨年度末までに、昨年度の評価結果を踏まえた評価指標の見直し（平成25年度目標値の設定、活動目標項目の追加）を行った。

#### (2) 評価作業

今回の評価は、昨年度に続き3回目となることを踏まえ、評価作業は職員7名によるWGが中心となって進め、素案作成後、職員の合同会議に諮り決定するという方法によった。

#### (3) 結果の公表

評価結果については、全職員にフィードバックし、個々の業務改善につなげるほか、HPにて公表し、県有施設としての説明責任を果たすために役立てたい。

※ 博物館活動の評価に至る経緯、自然史博物館の使命と事業方針等は、平成23年度の評価結果を参照してください。

### 3 外部評価

平成22年度の「魅力ある博物館を語る会」で示された外部評価については、平成24年度の評価から導入した。異なる分野から博物館活動に造詣の深い3名の外部有識者を専門委員に委嘱し、博物館活動に対する意見をいただき、昨年11月8日に公表した。今年度も同様に外部評価を行う予定である。

### 4 自己評価結果

#### (1) 資料の収集・保存と活用（「未来に伝える博物館」）

採集・寄贈等により収集した資料の合計点数は、目標値を大きく上回った。平成24年度に比べ6,500点ほど増加した。これは寄贈点数の変動によるところが大きい。

収集資料のデータベースは、常時サーバで運用されるとともに、定期的に磁気テープでバックアップされている。この磁気テープを万が一の事態に備え、館外での保存を行いたい。

資料は温湿度管理、日常の点検、定期的な燻蒸等により、安全に管理されている。

ESCO 事業完了により、収蔵庫の温湿度は新たな空調機器により管理されている。今後は微調整を加えながら適切な運用を継続したい。

収蔵スペースの不足は以前から深刻な問題となっているが、ESCO 事業に伴う空調機器の移設で生ずる空間を倉庫として活用することで、収蔵スペース不足の一部解消が期待できる。現在は運用計画を検討中である。しかし、収蔵資料は常に増え続けていくので、これからも保管場所については検討を続けていきたい。

展示での公開やレファレンスによる資料活用は、年度目標をほぼ達成しているが、これに甘んずることなく、より効果的な活用を模索していきたい。

## (2) 調査研究 (「魅力を引き出す博物館」)

調査研究の推進では、昨年度は3年計画で行われる上野村総合学術調査の3年目で、延べ43回(対前年度6回増)の現地調査を行った。さらに3年間の調査のまとめとして「群馬県立自然史博物館自然史調査報告書 第6号」を発行した。また、各職員が個々に行っている調査研究は12分野20研究、外部研究施設等と連携している調査研究は31研究あり、前年度に引き続き高水準での活動を継続した。研究成果の公表では、発表論文数29、学会発表数15、マスコミ等への発表15とコンスタントに成果の発表を行った。ただし講演会講座等数25は昨年度に比べ減少したが、これは昨年度は県レッドデータブックの改訂が行われ、生物分野の講演やマスコミ発表が突発的に増加したことに原因するため、今年度並みの値が目標値設定のめやすになりうる数値になると考えられる。

市民参加型調査や市民連携の調査は4件と変動がなかった。現状では博物館職員がアドバイザーとして参加したり共同研究的なものが多いが、市民の活動が主体となる研究など、調査方法に関する工夫も必要と思われる。研究課題やその成果の公表については、連携型も含め、回数等の量的な面のみならず、時期や効果的な方法などの質的な面も意識して検討する必要があると思われる。

## (3) 展 示 (「知を広め、高める博物館」)

来館者数は182,038人と過去最高を記録した昨年度を下回り166,533人であった。対面式アンケートによって得られたリピーター率は24年度が67%であるのに対して昨年度は58%に減少している。企画展示の魅力的な内容の提供と様々な媒体による広報活動を実施してきたが目標値を越えることはできなかった。常設展示は開館以来大きな更新はなく老朽化が否めず、展示物が壊されること等もあることから、故障が頻発している。故障時の職員による対応は年間221回で、速やかに対処できる体勢が維持できている。なお展示室の照明についてはESCO事業導入により省エネルギー効果の高いLED化が図られた。

企画展は常設展にはないテーマを選定し、その時々話題性のある内容で夏、秋、春の年3回、冬には写真展を開催している。昨年度の企画展は順に「甕れ カミツキマッコウ 古代ゾウ ～関東に眠る太古の生きものたち～」 「コレもソレもアレもみんなイネ科」 「生き物をまねる ―ネイチャー・テクノロジー―」を開催した。写真展は自然のフォトギャラリー「わたしの尾瀬 ～四季の彩り～」を開催した。夏は家族連れ、秋は学校団体を、春は家族連れなど一般向け、また季節を意識し展示を行って

いる。アンケート回答による昨年度の満足度は 77%と前年の 81%と比べて目標を若干下回った。予算は減少傾向にあるが、映像撮影・編集、造作物等は可能な限り学芸職員が製作しており、クオリティも向上してきている。冬の写真展はほとんどすべてが職員による手作りである。今後さらにリピーターの方々がまた足を運んでもらえるような魅力ある展示と展示方法の工夫を積み重ねていくことが肝要であり、その努力を継続していきたい。

展示解説アンケートにおける解説業務の満足度は 24 年度に引き続き 100%という高い評価を得た。これは解説・接遇研修を 27 回から 29 回と回数、内容を維持したことにより技量が向上したことが要因として考えられるが、さらにレベルの維持、質の向上に努めたい。

#### (4) 教育普及 (「知を広め、高める博物館」)

学びの魅力を感じられる事業の推進では、実施件数、参加者数ともにほとんどの事業で目標を上回り、参加者の満足度も高い。幼児から団塊の世代まで幅広い対象に広げたメニューを揃え、「夏休み自由研究教室」など来館者のニーズを的確に捉えたメニューを工夫した結果だと考える。

ビデオ上映会参加者数の落ち込みが大きかったが、ビデオ再生装置の不具合によりビデオ上映会を中止せざるをえなかったことが主な要因であり、設備改修後は参加者数が回復している。

学校教育支援の推進では、館内授業の件数が目標を下回った。主に東京方面からの学校団体入館者数が減少していることに原因があると考えられるので、館内授業に限らず、東京方面の学校団体の利用を促進させる広報活動を工夫するとともに、実地踏査において館の魅力を十分に伝えられるよう努めたい。

ボランティア活動では、登録者数、活動人数ともに増加し、目標をほぼ達成することができた。友の会活動では会員数が若干減少したが、継続率は大幅に増加しているので、主体的な友の会活動へと結びつけていきたい。

#### (5) 情報の発信と公開 (「知を広め、高める博物館」)

企画展や普及イベントなどの情報発信としては、ラジオや新聞など様々なメディアを活用し行った。また、ホームページの更新やメールマガジンの発行なども積極的に行い常に最新の情報を提供するよう心掛けた。県広報を介した発信は 31 件、館独自からの発信が 112 件であった。ホームページでの新着情報では、1つ1つのイベントに対し事前には募集を兼ねた情報提供を行い、事後には活動内容報告をしている。また、年3回の移動博物館や他館連携出前教室等も博物館の情報を公開する効果的な場である。さらに、高速道路の上里 SA でもチラシを配布し PR 活動を行った。

#### (6) シンクタンクとしての社会貢献 (「知を広め、高める博物館」)

公共の博物館として、その有する様々な資源(資料、情報及び職員の専門性)を活用し、自治体や各種団体への専門知識の提供や講師の派遣など、シンクタンクとしての機能を充実させ社会貢献を果たすことは博物館の重要な使命の一つである。

平成 24 年度から実績を集約したものは 3 項目のうち、レファレンス利用者の拡大は

目標値 200 件／年に対して 242 件／年（24 年度は 246 件／年）と目標値を越えることができ、ほぼ昨年度並みの結果だった。これは、専門性を求めるニーズへの対応を継続してきた結果であると考えられる。

学会・博物館関連団体の委員等を除く、自治体やその他の機関・団体の委員会の委員等として 31 件（昨年度 16 件）を受諾し、民間機関や博物館施設、公共団体からの問い合わせによる回答数は 120 件（昨年度 83 件）といずれも昨年度に比べ大きく上回る結果であった。

また、他の博物館等への資料の貸出件数は 26 件と増加傾向にあった。これらの実績数は、少ない職員数のなか健闘できたと考えられる。課題としては、学校・主任会などへの講師派遣件数の減少、学会・研究会における役員・委員等の受諾数の減少がある。学校や主任会への講師派遣は、博物館の専門性を広められ、学会との連携は専門性を高められる場でもある。次年度以降のこれら諸機関とどのような形で連携できるか検討する必要がある。

#### （7）マネージメント（経営）

安全で利用しやすい博物館施設への改善では、昨年同様、点字・外国語表記等が課題であるが予算的な制約から進展が見込めない状況である。

観覧者サービスの点検と質的向上では、案内業務のクオリティチェックと接遇研修を継続することで、一定の水準の確保を図っているが、更なる向上を目指したい。

博物館認知度の向上と利用者層の拡大では、新規事業の実施や連携事業の拡充などを行っているが、比較的認知度が低い東毛地域の利用者拡大が必要である。また、富岡製糸場の世界遺産登録を機に富岡市との連携強化も一層進めていかなければならないと考える。

職員の意識改革と資質の向上では、研修会・学会等への参加が少ないが、予算上の制約も大きいため、必要な予算確保に努めたい。博物館の事業は長年継続しているものが多いことからマンネリ化の危険があり、積極的な取組を呼びかけていきたい。

博物館支援組織のあり方について具体的な検討は進んでいないが、今後の重要課題と位置づけ、中長期的な視点に立って検討を進めていきたい。

博物館活動への理解及び外部協力の確保は、厳しい財政状況から予算確保が難しくなっているが、博物館の取組を継続して発信し、外部資金の導入など企業等からの支援増加に努めたい。

防災意識の向上と危機管理体制の強化では、危機管理マニュアルを作成し地震を含む 2 度の訓練を行った。マニュアルについては、随時、必要な見直しを行っていきたい。

博物館評価システムの構築では、昨年度、外部評価を導入し有識者から意見をいただき HP で公開した。いただいた意見を受け止め、今後の博物館活動に生かしていきたい。